

第 1 3 8 号

平成 1 3 年 3 月

E-mail : © 2001
 shimz@mb.infoweb.ne.jp
 LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

編集 発行 人

清水 吉 男

(株) システムクリエイツ

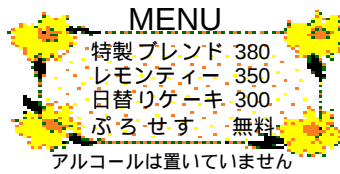
横浜市緑区中山町 869-9

電話 045-933-0379

FAX 045-931-9202



3 回め



と言って、彼は寂しさが込み上げてくるのを
 じょっと押さえて、カップを眺めている。

「どうすればいい?」

「分かんない」

「“分かんない”という言葉を手軽に使っちゃだめだよ。思考を停止させる代表的な言葉だからね。考えてみて。どうなれば良いの?」

「今のプロジェクトが、もう少し無駄なくうまく出来れば、時間がとれるかも」

「ということは、無駄な作業を繰り返しているってことに気付いているわけだ」

「確かにね、先週、ちょっと気になったんで、これまでのバグの件数を調べたんだ。件数からこれに使う時間を概算してみたんだけど、ざっと1500時間ぐらいいは使っているそうなんだ。一つひとつは気にならなくても、集まっちゃうとばかにならないもんだと思った。しかも原因の半分近くは検討が不十分で、条件が漏れていたような、いわゆる仕様関係のバグなんだ。今思えば、最初にもう少し時間をかけておけば、今ごろは、もっと楽できたかな」

●●●●●●●●



「どうやら、答えは見えているようだね。昔も、そうやって時間を失ってしまひ、結局、時代の求める技術

を身に付けることができなかった人がたくさん居た」

「そうか、それが“35歳定年”を受け入れることに繋がっているわけか。“35歳定年”は、ある意味では救済措置になっているのかも。そういえば先輩達も、去年あたりから、ソフトウェアの技術の話題が減っていたな」

「作業のプロセスを定義できないから、習慣化したやり方を変えることも出来ない。だから、新しい要求に応えきれない。勢い、自分の持ち時間を投入して対応しようとする。しばらくはそれでも間に合うが、その内に間に合わなくなってくる。悪循環だね」

「でもこれって、何かおかしいよ」

「ほう、おかしいって?」

「だって、これじゃ組織の中に“プロ”が育たないってことでしょ? いつまでたっても組織の中のソフトウェアの技術があるレベルを越えないってことにならない?」

●●●●●●●●

「そう、結局、殆どの人は、上手くいくプロセスを見つけることが出来ないまま現場を離れてしまうわけだ。日本でCMMのリードアセッサーが生まれてこない最大の理由かな」

「仕事の仕方を変えないと、新しい技術をキャッチアップできないし、その結果が“35歳定年”に繋がっているんだね。なんとかしなくちゃ」

「そうだね、何とかしなくちゃね。ただし、あまり背伸びをしては続かなくなるからね」という私の声を確認して、彼は席を立った。ドアを開けて出ていく彼を目で追いながら、“35歳定年”を越えて欲しいと祈っていた。昔の自分がそこに重なっていたのかもしれない。

■

“35歳定年”は、プロセスの改善と共にそれを破る技術力を伴わないかぎり、受け入れざるを得なくなる

「いらっしゃい。あれ、今お帰り?」
 いつもは朝しが寄らないのに、今日は珍しく夜の7時前にやって来た。その上、いつもはカウンターの端に座るのに、今日はカウンターの真ん中に座った。どうやら、私を占有するつもりようだ。

「今日はなんか、落ち着かなくてね」

「いつものコーヒーでいいのかな?」

と聞くと、彼は、軽く頷いて、胸のポケットからたばこを出し、カウンターの右手のところに置いてあった灰皿を手前に引き寄せた。背中に「不安」を背負っているのが見える。なるほど、例のパターンだなと思ひながら、コーヒーに熱湯を注ぐ。

「ソフトの世界に入って何年になる?」

と誘ってみた。

「まだ、7年だけだ。あつという間だったな。

マスターは、ソフトの世界に何年いたの?」

「私? そうだなコンサルタントの期間も含めると40年ほどになるかな」

「へー、よくそんなに続いたね」

「そりゃ、面白い世界だからね。本心は、今でもやりたいんだよ。でも、さすがにそうも行かなくなったんで、辞めたわけだけど、気になるもんだから、こんなことやっているってわけだ」

「マスターって、本当に好きだったんだ」

「考えてもみてごらん。こんなにワクワクする世界が他にあるかい? いつも新鮮で、一つの問題が片づいたと思ったら、また新しいテーマがそこにあって、それに使えそうな方法も、よく見ると筈のように地面から芽を出している。ただし、他の人には見えない。いやー、今でも血が騒ぐね」

「僕も、この世界は楽しいし、ずっとやっていきたいと思っている。でも、先輩を見ていると、いつまでやれるんだろうかと不安になってくる」

思った通りだ。彼は社内の「エスカレータ」が気に入りだしたのだ。

煎り立てのコーヒーを、今日は薄い

ブルーの生地のカップに入れて、カ

ウンターの前に差し出した。



●●●●●●●●

「今日、先輩に辞令が出て、来月から課長になっちゃう。これって、歓迎すべきことなのか良く分からなくて。先輩も別に喜んでる様子は見えないし、何か、割り切っちゃてるんですよ。サラリーマンってこんなものかな」

「へー、君は“サラリーマン”だったのかい?」

と、ちょっと意地悪してみた。

「えっ、いや“サラリーマン”のつもりはないけど」

「“けど”、やっぱりサラリーマンなんだ」

彼は困った顔をして、私を恨めしそうに見ている。

「僕はね、この“サラリーマン”って言葉が嫌いなんだよ。こいつが日本をダメにしたとも思っている。油膜の上に垂らした洗剤のように、一瞬にして“プロフェッショナル”というものを鍋の隅っこに追いやってしまった。そうした会社の中では“プロ”が育たなくなった。そのうち、組織は古くなったオイルのように、コテコテになってしまった・・・」

「先週、先輩と話しをしていたら“35歳定年”というのが出てきたんだけど、これってマスターの時代もあったの?」

「あつたね。私はほとんどフリーでやっていたので、その“定年”には引掛からなかったけどね」

「フリーでやっている人には“35歳定年”は無いの? 確かに“定年”というのはいないよね」

「フリーでも、実質的に“35歳定年”を引きずっている人はいっぱいいたよ。もちろん、客の要望に応えられないから、いろいろと誤魔化していたと思うけど」

「マスター、良く分からなくなってきた。“35歳定年”って何なの?」

と、コーヒーを一口すすって切り込んできた。

「そうね。一言で言うところ“限界点”かな」

「“限界点”? それ以上、出来ないってこと?」

「あなたは、この世界に次々と出てくる新しい手法や知識をキャッチできているかな?」

「それを言われると弱いな。気にはなっているんだけど、なかなか時間がとれなくて」

「なるほど、本は買っても積んだまま?」

「そんなところかな」

「新しい手法に対応できている?」

「いや、自信ないな」

「なるほど」

と言って、彼の緊張を和らげるために、軽く笑って見せた。



●●●●●●●●

「C++も、オブジェクト指向をマスターして使っているわけではないってことね」

「そんなところかな」

「じゃ、“35歳定年”って分かるだろう?」

言葉では説明できなくても、そこに“定年”のような仕切りがあることは見えているのではないの?」

「何となくね。でも自分ももっと現場での仕事を続けたい。管理職はやりたくないからな」

「それって、“管理職”って仕事を誤解しているところはあるけど、それは置いておくとして、どうして続けられないのだろう?」

「やっぱり、新しい技術を身に付けていかないと難しいよね」

「そうだね、でも、今は目の前の仕事の方が片づかなくて、とてもそんな時間はとれない?」

「そう」

暁鐘の音

121

国を支えない教育

三月といえば、卒業のシーズンである。上級の学校に進む人もいれば、社会に出てくる人もいる。不安と期待の季節でもある。気掛かりなのは、彼らははたして「学ぶ楽しさ」を手に入れただろうかということである。義務教育過程や高校の様子を見てみると、学習が苦痛の対象となっているように見える。

教える側の質が低下したことも、それに拍車をかけている。「職員室」には、単に教育課程を履修した「有資格者」であって教育の「専門家」ではない人が多くいる。彼らは、教科内容についての必要な知識は、確かに持っていると思われるが、「教えるための技術」は、ほとんど持っていない。いや、実際に小学校の先生（教師）を見ていると、彼ら自身が、事前にそのような技術を教えられていないのではないかとと思われる。さらに言えば、実際に職場に着いてからも、生徒に「学ぶ楽しさ」を教えるための技術を身に付ける機会はないであろう。結局、自らの立場を守るには、生徒を型にはめるしかないのである。知らないなかつたことを知ったときの喜び、出来なかつたことが出来たと

きの楽しさ、そうして手に入れたそれらの知識や方法が、なんと人や社会に役に立つことに気付いたときの感激を子供たちに与えられない教育に、いったいどんな意味があるのだろうか。

教育は、単に「自分の」知識や技術を増やすことが目的ではない。それをもつて、社会や人に対して貢献してもらうことを目指している。そうではない「義務教育」の制度なんて無意味である。教育を受けた者だけ（受けることが出来る者だけ）が受ければ良いということになってしまふ。教育は、それぞれの人が社会において自分の役割を見いだせることを目指している。特に、初等教育において、そのような姿勢で学習することの意味を、きちんと伝えなければならぬにも関わらず、それを怠っている。

今日の教育の質の低下は、間違いなく明日の日本の社会の荒廃に繋がる。今の状態では、多くの若い人たちが時代の求める労働の機会を逃すからである。今日の日本で求められているのは、「知識労働者」としての労働力であり、二〇年前の新卒者に求められているものとは、大きく違っている。だが、教育は、それを満たしていない。生徒も、学校で教えられていることが、自分の身の回りに起きていることとずれていることに気付いている。そ

れでも、所定の過程を終えたことで「卒業」させられてしまふ。日常的に学習する習慣も、グループで問題に当たる習慣や、その際に必要となる知識や処し方も身に付けていないのである。新卒者も含めて、二〇代の失業率が非常に高いにも関わらず、政府は特に問題視している気配はない。むしろ、中高年の失業率の方を気にしている。だがこの対応のミスは、日本の明日にとつて大きな問題だ。若い人が仕事につけないということは、彼らが時代の求める労働力として準備できていないのか、逆に産業の方が、新しい時代に切り替わっていないかのいずれかだから。何れであつて、問題は小さくない。

今、我が国は一〇年という長期の不況の中に喘いでいる。五年あまりの間に一三〇兆円という国家資金を有効に活かせずコンクリートとアスファルトの中に捨ててきた。その殆どは、既得権者（既成産業）の当面の痛みを和らげるための対処療法に使われ、根本的な問題を解決する方向には使われていない。「構造改革」という文字は飛び交っているが、その箱の中には何も入っていない。

まるで、今日の経済の問題は、不良債権の処理が進めば解決するかのうように宣伝されている。二〇年間なら、それで日本の経済は浮上しただろう。だが、金融機関を含めた不良債権の最終処理の対応は、当面の対応であつて、マイナスの要素を「0」に戻すだけで済まない。問題は、日本の「競争力」が脅かされていることであり、アジアを含む多くの国々は、日本の経済の拠り所であつた分野に取つて代わる

準備を整えているのである。したがつて、本当の意味での日本の競争力を確保するには、「教育」を立て直すしかないのである。

競争力の源泉は教育の質の高さにある。我が国が、明治維新によって外国からの侵略を防ぎながら列強の仲間入りが出来たのも、その背景には教育の質の高さがあつた。あの時代に、国を開くことに対応できる人材が育成されていたことは、世界史の上でも驚きである。また、戦後の復興にも、既に国民皆教育が行き届いていて、均質で教育レベルの高い労働者が、大量に確保できたことが大きな要因となつた。つまり、教育こそが、国の繁栄を支える源泉なのである。この資源の無い国が繁栄したのも、時代の求める教育が行

今月の言

「憂患に生きて安楽に死す」

孟子

科学技術の発達に伴つて、私たちの生活は随分と楽になつた。自動車の普及で、気ままに移動する手段が手に入った。コンビニエンス・ストアの普及で調理済み食品が豊富になつて、良いことがどうも分らないが、食事の準備もいらない。こうして余つた時間を消費する方法は巷に溢れている。

これらは皆、消費こそが豊かさをもたらすという考えに基づいている。今から何をしても過ごそうかと考えることもない。手元のリモコンのボタンを押せば、目の前のパネルに好きな映像が映し出され

われていたからである。今、その教育が硬直化し、時代の求める人材を生み出せなくなっているのである。

シンガポールでは、九八年から二〇〇〇年、世界の各分野の一級の大学二〇校を誘致する計画で、INSEAD、MIT、シカゴ大など既に六校の誘致に成功しているという。教育こそが国を豊かにするということに気付いているのである。一方、日本では、一七〇〇人の学生を擁するテンプル大の日本校は、いまだに「大学」として認められていない。日本の大学を守るために、いや、文部官僚の天下り先を確保するために、政府は大学の鎖国政策を続けている。このままでは日本は、二一世紀中に「歴史の中の国」になつてしまふ。

経済的な裏付けさえあれば、多くの人は頭を動かさなくても「今」を楽しむことができる。娯楽も、その殆どは「人工物」であり、人から提供される。確かに生活を楽しめるようになった。

だが、何かを失っている。豊かなさの尺度を「GDP」で計つたり、消費を代償に楽しさを手に入れるという考えは、どこかで行き詰まる。ロボットに心の癒しを求めているのは、どこか間違っているように思う。「安楽に生きて、憂患に死す」では困るのである。日本には「愉しむ」という言葉もある。